

ジャガイモと映画 ＜フライドポテト2（フリッツ、チップス）＞

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

17 地下鉄のザジ（原題：Zazie dans le métro）

1960年、フランス。監督：ルイ・マル。

フランスの詩人・小説家であるレーモン・クノーによる1959年発表の小説をコメディ映画化したもの。

地下鉄に乗るのを楽しみに地方から出てきた10歳の少女ザジ（カトリーヌ・ドモンジョ、声：瀧崎ゆり子）が、2日間パリに住む親戚のガブリエルおじさんに預けらる。

ママは恋人とデートに行ってしまう。ザジはおじさんの家を抜け出し、地下鉄のストライキで混乱するパリの町をタクシーで移動して、蚤の市でジーンズを入手し、エッフェル塔に登るなど、パリでやりたいことは全部やってのけてしまう。

靴修理の店を窓越しに見た後、入ったレストランで、著者期待の山盛りのフライドポテトを両手で次々と口に運び、ペロリと平らげて大人達を驚かすシーンがあった。

フライドポテトはアメリカではフレンチフライと言う。しかし、そのフランスでは、ポン・ヌフ、あるいはポム・ド・テール・フリッツ（Pomme de terre frites）、又は短くフリッツと呼んでいる。また、別名のポン・ヌフ（Pont Neuf）は、ジャガイモ（Pomme de terre、土中のりんご）の

Pommeから取ったものではなく、フランスの首都パリのセーヌ川に架かる橋のことである。意味は「新しい橋」であるが、今では一番古いものになった。この橋はアンリ4世によって建てられ、橋の袂に王の騎馬像がある。昔ここで王の好きなポム・フリッツが売られ、形が似ていたことから、ポン・ヌフでも通用するようになった。

ジャガイモの切り方のポン・ヌフは、拍子木切りであり、アリユメリット（5 mm 角）やジュリエヌ（千切り）より太く、ジャガイモだけに使われている呼び名である。また、ゴーフレットと呼ぶ切り方は、ジャガイモを薄い格子状（クリスカット）にしたものであり、マンドリーヌと言う機械を使って1回ずつ90度に回転させてスライスする。



写真：セーヌ川のポン・ヌフ橋

18 シュティ（北部の人々）の地へようこそ 原題：Bienvenue chez les Ch'tis

2008年、フランス。監督：ダニー・ブーン。フランスで人気の高かった映画。

フランス南部の郵便局長アブラハム（カド・メラッド）が妻のために地中海沿いのコート・ダジュールに転属させてもらおうと試みたが失敗。逆にベルギーとの国境に近くて天候が悪く、住む人の言葉は訛っていて、生活態度も今イチと聞かされた北部パ・ド・カレ（Nord-Pas-de-Calais）へ転勤となる。2年間の赴任中に、すばらしい景観、文化、人なつっこい部下、温かい出会いに恵まれ、彼はすっかり北部好きになる、という分りやすい展開である。

映画の舞台はパリ北駅からリヨン行き高速鉄道TGVでダンケルクまで2時間かかる。さらにローカル線に乗り換えて2駅目のベルグ。レンガづくりの城壁に囲まれた小さな街である。映画では中央の広場にフリット小屋（フライド・ポテトを売る店）があることになっている。フランス人もジャガイモが好きでなのである。

フランスで人気の高いジャガイモ品種に「ビンチェ（ビンチ）Bintje」がある。これは20世紀初頭オランダのド・フリースが育成した品種。農家から農学校の先生になった彼は1929年に他界するまでの25年間に150もの品種を育成した。品種ができる度に、新たに名前をつける必要がある。知っている偉い役人、惑星、神、政治家達から始まり、彼自身の9人の子供、60人の身内などから次々とつけていった。ついに、3学年にいた可愛い女生徒の名前も使うことになった。この品種はMunstersen x Fransenの実生の中から選抜し、1904年に

品種としたものであった。

この品種は多収であり、環境適応性が高く、蒸し、焼き、フレンチフライ、ポテトチップス、マッシュポテトなど広く使えるものであり、欧州やアフリカで今も人気が高い。特にフランスやベルギーで好んで栽培されている。アメリカの「ラセット・バーバンク」やわが国の「男爵薯」のように息の超長い品種である。最近是小ぶりの「シャルロット Charlotte」と「ビンチェ」の子供の「サンバ Samba」が人気をのぼしているとか。

19 フィル・コリンズ in バスター（原題：Buster）

1988年、イギリス。監督：デビット・クリーン。

1963年に実際に起こったイギリス犯罪史上最大の列車強盗事件の話であるが、国民的英雄にまでなった強盗バスターと、その愛妻の逃避行を描いたもの。

舞台はロンドン。詐欺師バスター・エドワーズ（フィル・コリンズ）は愛妻ジューン（ジュリー・ウォルターズ）と娘に囲まれ、幸福な結婚生活を送っていた。バスターは、仲間からロイヤル・メールが多額の現金を輸送することを知らされ、強盗を計画する。

見事大金を手にした彼らは、英国国内を転々とする。しかし、やがて捜査の手が伸び、バスターは妻子を連れてメキシコに逃亡する。

妻ジューンは、「あたしはステーキとチップスがどうしても食べたいの」と口に出してしまうシーンを見つけた。

普通の日本人が連想するチップスとは薄

くスライスして揚げるものである。しかしイギリス人はフライドポテトを指す。イギリスでは人気のあるファストフードである"フィッシュ・アンド・チップス"（魚のフライとジャガイモのから揚げ）で知られるように、チップスとはフライドポテトのことである。一方日本人好みの薄くスライスしたチップスのことはクリスプス crisps と呼ぶ。これには、さわやか、歯切れがよい、パリッとした、などの意味があり、良い響きである。

映画でバスターは、「そんなこと言ったら、ここはイギリスじゃないんだぜ、そんなものあるもんか」と答えていた。ステーキならどこでも食べられるが、フライドポテトが食べたくなったのだ。これは彼らにとって主食みたいなものだから、我々が外国旅行して、「そろそろ、銀シャリに味噌汁にありつきたいね」と言うようなもの（最近の海外旅行では簡単に和風レストランが見つかるが）。

その後ホームシックにかかったジューンが帰国することになり、バスターも逮捕を覚悟の上で妻の後を追う。やがて十数年後、刑を終えたバスターはジューンと共にウォタールー駅の隣で花屋を営んでいるのだった…

イギリスのミュージシャンであるフィル・コリンズにとっては映画初主演の作品であり、自身の唄う挿入主題歌『恋はごきげん (A Groovy Kind of Love)』は大ヒットした。

イギリスの街で見かける"フィッシュ・アンド・チップス"のジャガイモは、日本のKFC店などで見かけるものよりやや太いものが多い。そして使われる魚は白身の

タラ類の切り身が多く、店によってはカレーを使い、魚に付ける衣は小麦粉を卵や水で溶いたものである。生地の色合いを付けるため、少量の重曹と酢を入れる。また苦味と食感を与えるために好みのビール（エール）を入れて溶いたりする。

1939年のイギリスの映画に『チップス先生さようなら、Goodbye, Mr. Chips』と言うモノクロ作品がある。イギリスの映画だから、チップス先生とはフライドポテト大好きな先生につけたあだ名と思った。念のため新潮文庫のヒルトン著・菊地重三郎訳の本を購入して、確認したところチップスとは真面目な苗字であり、映画は全寮制のパブリック・スクールの男性教師の話であった。

20 アウト・フォー・ジャスティス（原題：Out For Justice）

1991年、アメリカ。監督：ジョン・フリッ。ステイヴン・セガール主演の犯罪アクション映画。

舞台はニューヨーク・ブルックリン。刑事ジーノ・フェリーノ（ステイヴン・セガール。声大塚明夫）は、相棒のボビーを幼馴染でマフィアのリッチー・マダーノ（ウィリアム・フォーサイス。麦人）に白昼堂々、家族の前で惨たらしく射殺される。目指す敵のトップは親友であったが、復讐に燃えて単身闘いに挑み、執念深く街中を探し、リッキーを追ひ詰めてゆく。東洋武术を使うステイヴン・セガールらのアクションも見ものである。

終わりが近いところで、吹替え日本語で『ポテトフライが食べたい』と言う言葉が聞けた映画であった。